

近代日本語の間接疑問構文とその周辺

—従属カ節を持つ構文のネットワーク—

志波彩子*

1 はじめに

近年、高宮（2003, 2004, 2005）や高山（2015）、衣畑・岩田（2010）等の研究により、日本語の間接疑問構文¹の歴史的な発達の過程が徐々に明らかにされつつある。日本語の間接疑問構文については、現代語においても、江口（1990, 1994, 1996, 1998ab, 2002, 2013, 2014等）の一連の研究を除いてはほとんど研究の蓄積がない。特に、間接疑問構文にどのようなタイプがあるか、また間接疑問構文に関連した構造を持つ構文とこれとの関連についての詳細な記述はまだない。こうした中で、高宮（2003, 2004, 2005）の一連の研究は、間接疑問構文の歴史的な発達を扱った画期的な議論であり、現代語の間接疑問構文を分析する上でも参考になる分類の枠組みを呈している。

本研究は、主に高宮の一連の研究を参照しながら、その歴史的な発達の痕跡が明治期の日本語にどの程度見られるかを明らかにすることをひとつの目的とする。具体的な方法としては、近代語のコーパスから抽出された間接疑問構文とその周辺の構文タイプの分布を示す。そして、ときに現代語とも対照しながら、近代日本語における間接疑問構文の特徴を記述し、その周辺の構文との関係（ネットワーク）を考察することを第2の目的とする。なお、本研究では、次のような、主-述で構成される従属節に助詞カが後接し、このカ節を直接に受ける主節述語が心理動詞である構文を典型的な間接疑問構文と見なす。

(1) 和夫がいつ戻ってくるか（は）分からない。

2 高宮（2003, 2004, 2005）

高宮（2003, 2004, 2005）の一連の研究では、間接疑問構文をめぐる様々な問題が整理され、分類・考察されている。まず、高宮（2003）では、間接疑問構文とこれに関係する他の構文との関係について、カ節につく助詞の有無や主語の位置、潜伏疑問名詞句などとの関係をめ

* 本稿は、『国立国語研究所論集』第10号（2016年1月刊行）に掲載された同題目の論文に修正を加えたものである。

本稿の執筆にあたり、プロジェクトリーダーの金水敏先生と本プロジェクト共同研究員の江口正先生に大変多くのご教示を賜りましたこと、ここに深く感謝申し上げます。

¹ 本研究では、「疑問節-カ 主節述語」という文全体を「間接疑問構文」と呼び、「疑問節-カ」を「間接疑問節」と呼ぶ。

ぐって考察されており、これによって、間接疑問構文に関係のある構文として、本稿で二文連置構文²、潜伏疑問構文、内容構文と呼ぶものが主に取り出されている。

次に、高宮（2004）では、助詞カによる間接疑問構文は室町時代に少数現れ始め、江戸期になって一般的に見られるようになったことが主張されている。間接疑問構文が成立する以前は、和文資料では引用のトを伴う構文（(2)）、注釈句による構文（(3)）、和漢混交文ではこれに加え、トイウ名詞ヲによる構文（(4)）が用いられていたことが指摘されており、興味深い（下線は原文）。

- (2) その故も、いかなりけむ事とも、思ひ分れ侍らず。(源氏物語・宿木, 高宮 2004:112)
- (3) …折^レにつけて、(大君を) 思ふ心の違へる嘆かしさを (大君に) かすむるも、(大君は) いかゞ思しけん、(著者は) 知らずかし³。(源氏物語・竹河, 高宮 2004:112)
- (4) 其外庄園田畠いくらという数を知らぬ。(平家物語・上, 高宮 2004:112)

さらに、高宮（2005）では、「疑問節-カ 主節述語」という間接疑問構文の歴史的発達が取り上げられ、この構文は、まずカ節が選択疑問タイプ（「彼が来るか彼女が行くか知らない」）から現れ始め、肯否疑問タイプ（「彼が来るか知らない」）が現れ、これに遅れて疑問詞疑問タイプ（「彼がいつ来るか知らない」）が江戸後期に一般的に見られるようになったことが述べられている。また、主節述語のタイプについては、まず藤田（1983, 1997）の未決タイプ（「知ラヌ」）から発生し、室町から江戸にかけては未決タイプがほとんどで、形式に制約がある形で対処タイプ（「タズネウ、トヒテコヒ」等）も存在したが、既決タイプ（「知っている」）は現れないことが明らかにされた。

なお、(1)を見れば分かるように、間接疑問構文における疑問節（カ節）は助詞を伴ったり伴わなかったりすることがあるが、高宮の一連の研究により、カ節に助詞を伴う間接疑問構文は、近代（明治時代）になって一般的に見られるようになったもので、間接疑問構文が現れ始めた室町時代からこの構文がより広く用いられるようになった江戸時代にかけては、いまだカ節に助詞を伴う例はほとんど見られないことも分かっている。

² ただし、高宮（2003）の段階では、この構文を注釈句と呼んでいる。その後の議論で、「注釈的二文連置」という術語を用いている。この用語は、野村（1995）による。

³ 高山（2015）は、このような「節-けむ 知らず」という構文が上代から認められることを指摘し、間接疑問文の萌芽がすでにこのころに見られたことを主張している。この、「節-けむ 知らず」とは、現代語に訳せば「節-ただらう 知らない」という構文形式である。これに関連して、森・平塚・黒木編（2015）では、鹿児島県甕島の方言において、標準語のダロウに相当する推量や不確かを表わす形式「=joo (ヨー)」が、間接疑問節のマーカースとして用いられることが述べられており、興味深い（「どけえ行ったよう知らん（どこに行ったか知らない）」(6.5.2 (pp116-117), 7.7.1 (pp142-144)。ここで挙げられている例文と白岩広行氏の私信によると、この方言においても間接疑問構文の主節述語は未決タイプが多く、対処タイプも使われるものの命令・依頼のように形式が限られているように見える。高宮（2005）が調査した江戸後期の間接疑問構文と同じような特徴を見せている。

3 典型的な間接疑問構文とその周辺の構文

高宮（2003, 2004, 2005）の議論によって、もっとも典型的な狭義の間接疑問構文は次のような特徴を持つことが明らかになった（志波・金水 2015）。

(5) 典型的な間接疑問構文

- a. 主語と述語を持つ節に助詞「か」⁴が後接し、そのカ節を直接に受ける動詞（主節述語）がある。
- b. カ節の直後に格助詞や主題・取り立て助詞（「は」「も」等）が後接することができる。
- c. カ節内には、打消しや時制、ノダ文の「の」は含みうるが、ダロウや丁寧は含み得ない。

上のすべての条件を満たしながら、典型的な間接疑問構文とはやや性質のことなる構文がある。それは、江口（1996）で「依存性」の述語とされるものを主節述語に要素として持つ構文である。本研究ではこれを依存構文と呼ぶ（(6)）。依存構文は2つの間接疑問節を持ちうる構文である。

(6) 誰と結婚するかで彼女が幸せになれるかが決まる。

(5a)に関して、従属カ節を持ちながら、カ節を直接に受ける主節述語が存在しない構文がある。その代表的な構文が二文連置構文（懸垂疑問文、石居 2008）である（(7)）。高宮（2003）では、この二文連置構文が自問系直接疑問構文に近いことが指摘されている。一方で、同じくカ節を直接に受ける主節述語は存在しないものの、思考・疑惑・問題等を表わす名詞がこれを受ける構文がある。この構文におけるカ節は被修飾名詞の内容節であるため、本研究ではこれを内容構文と呼び、間接疑問構文に近い構文として位置づけた（(8)）。

(7) 宮ははや気死せるか、推伏せられたるままに声も無し。（金色夜叉）

(8) 「【前略】露骨に云って終えば、時代におくれやしないかなどいう考えは、時代の中心から離れて居る人の考えに過ぎないのだろうよ」（野菊の墓）

(5b)に関して、上の二文連置構文はカ節を受ける主節述語がないため、当然カ節に助詞を後接させることはできないが、間接疑問構文の下位タイプであっても、助詞を後接させることができない構文がある。それは、江口（2013）で「複雑述語」と呼ばれる述語の一部⁵で、「疑問

⁴ 本研究では節に助詞「か」が後接するもののみを扱うが、「か」のほかに「やら」が後接する間接疑問構文も存在する。ただし、ヤラ節を受ける述語のタイプは限られている（高宮 2004）。

⁵ 複雑述語であっても、「節・カに懸念を抱く／が心配になる／は判断が難しい」など、カ節に助詞を後接させることができるものも少なくない。なお、この複雑述語に用いられる抽象名詞とカ節の関係は、6.5で扱う「内容構文」における抽象名詞とカ節の関係と同じである。

が残る，不審が残る，見解を明らかにする，議論を進める」などの思考・判断・疑惑・言語活動などを表わす名詞と動詞との組み合わせによる述語である。この種の間接疑問構文は，カ節に格助詞を後接できないという点では主節述語との結びつきが弱く，相対的に従属度が低い疑問節であると言えるが，「について」等が後接することはでき，また，構文全体を疑問文化することができる点，すなわち主節述語の疑問のスコープにカ節が入ることができる点で二文連置構文とは異なり，やはり間接疑問構文のサブタイプであるとみなせる。

- (9) a. 彼が約束を守ったのか疑問が残りますか。(複雑述語の間接疑問構文)
b. *彼が約束を守ったのか，彼女は機嫌がよかったですか。(二文連置構文)

(5c)に関して，ダロウを含むカ節は助詞を後接し得ない上，主語をカ節の前に置くことができないことから，従属度が低く，典型的な間接疑問構文とは異なると考えられる。

- (10) 何人がパーティーに出席したのだろうか，私は知らない。(高宮 2003:110)
(11) *私は，何人がパーティーに出席したのだろうか，知らない。(高宮 2003:110)
(12) 何人がパーティーに出席したのだろうか，私はそれを知らない。
(13) 何人がパーティーに参加したのだろうか，私は参加人数を知らない。(高宮 2003: 110)

(10)のような文は，(12)のようなカ節を受ける照応形が省略された文とも考えられる。本研究では，(12)のような主節に照応形をもつ構文を照応構文と呼び，(10)のような文は典型的な間接疑問構文と照応構文との中間に位置するものと見なすことにする。また，この照応構文に近い構文として潜伏疑問構文((13))がある。照応構文も潜伏疑問構文も，主節の心理述語が間接的にカ節を受けるという点で二文連置構文に比べれば間接疑問構文に非常に近い構文であるが，カ節にダロウを含む点及び助詞を後接し得ない点で典型的な間接疑問構文と一線を画す。

さらに，間接疑問構文に体系上近いところに位置する構文として間接感嘆構文(稲田 2007)がある((14))。間接感嘆構文は，カ節にダロウや丁寧を含み得ない点，また主節述語が心理動詞である点で，間接疑問構文に近いところにあると考えられる。

- (14) 彼は自分がいかに幸せかを思った。

一方で，間接感嘆構文では，カ節が疑問ではなく話し手にとって確定した事実であり，他の誰の疑念をも表していない点で，間接疑問構文と異なる。また，間接感嘆構文を構成する心理述語は，間接疑問構文のそれとは典型的には異なる点でも，これを別の構文と見なす必要がある。さらに，間接感嘆構文の場合，カ節に後節する助詞が必須であるという特徴がある。

以上，典型的な間接疑問構文の周辺に位置する構文として，これに近いものから複雑述語の

間接疑問構文、照応構文、潜伏疑問構文、依存構文、間接感嘆構文、内容構文、二文連置構文があることを確認した。本研究では、以上の構文以外に、さらに以下の構文を認め、カ節の分類を行った。まず、引用の「と」に続くカ節は、かなり直接疑問構文に近いもの((15))と間接疑問構文と意味・構造的にほとんど変わらないもの((16))があるが、これを引用構文とした。その他の構文として、(17)のような「節-かのごとく／かのように」という形で「あたかも」などの副詞と共に起る構文を比況構文とした⁶。また、(18)のように「動詞の肯定形-カ 否定形」という形で時間や位置がその前後であることを表わす構文を前後構文とした。(19)のような「節-のみか／ばかりか」や「するが早いか」といった構文は慣用的な構文とした。最後に、(20)のような構文はカ節が疑問も感嘆も表わしていない点で間接疑問構文から体系上かなり離れたところに位置する構文と考えられるが、これを選言構文とした⁷。

- (15) 【前略】恐れ入ます、お召物が濡れますと言ふを、いいさ先させて見てくれろとて氷袋の口を開いて水を搾り出す手振りの無器用さ、雪や少しはお解りか、兄様が頭を冷して下さるのですよとて、母の親心付れども何の事とも聞分ぬと覚しく、【後略】(にごりえ・たけくらべ)
- (16) 何方かという、昔よりも今の方が却て肥っていはしまいかと疑れる位であった。(道草)
- (17) 何時此处へ来て、何処から現われたのか少も気がつかなかったので、あたかも地の底から湧出たかのように思われ、自分は驚いて能く見ると【後略】(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)
- (18) 今の三越の向側に何時でも昼席の看板が掛かっている、その角を曲ると、寄席はつい小半町行か行かない右手にあったのである。(硝子戸の中)
- (19) 物音は罷まぬのみか、次第に高まって、近づいて、遂に思い切った濶歩の音になると——少女は起き直った。(浮雲)
- (20) 向うで聞かぬ上は乗り越すか、廻らなければならん。(草枕)

間接疑問構文は、以上挙げたような構文タイプとの相互関係の中で発達してきたと言える。これらの構文タイプを念頭に置きつつ、以下、実際のデータを分析していく。

4 方法とデータ

扱ったテキストは、『CD-ROM 明治の文豪』(新潮文庫)の中から夏目漱石の数作品⁸と翻訳作品、石川啄木の作品を除いたテキストである。これらを、『Chaki (ChaKi.NET 2.098 Revision

⁶ 現代語には、比況構文と連続的である「節-かに見える」(仮想構文)があるが、近代においては未だ発達していなかったようで、用例が見られない。

⁷ ただし、衣畑・岩田(2010)では、選言のカ節と間接疑問のカ節は歴史的には別のものであると述べられている。

⁸ 『明治の文豪』には漱石の作品が多く含まれており、他の作家の用例数との差が大きくなりすぎるので、漱石の作品のうちのいくつかを除くことにした。

498)』を用いて形態素解析し、表出形が「か」かつ品詞が「助詞」という条件で検索した。抽出した用例について、「賑やか」「裸か」「かぶり」など、助詞の「か」ではない用例を削除し、慣用表現（そうか、どうか、いいか、～よりか、etc.）と「疑問詞+か」（何か、いつか、いくらか、何枚か、etc.）を別にし、直接疑問（～か。、～か？、～か、～かな。、～じゃないか、etc.）を分けた。その上で、文中のカ節について、「動詞+か」、「名詞（+助詞 or +コピュラ）+か」、「動詞+のか」を分けた。以上の分類を行ったうえで、今回の調査では、動詞に直接「か」が後接する用例（ただし、「かどうか」は含む）を対象とした⁹。それぞれの割合は以下の表 1 に示した（なお、数値は絶対的なものではなく、目安である）。

表 1 近代語の小説（文学）テキストにおける助詞「か」の分類

動詞+か ¹⁰	名詞+か	動詞+のか	疑問詞+か	直接疑問	慣用	TOTAL
1610	1274	715	1555	4043	240	9437
17.1%	13.5%	7.6%	16.5%	42.8%	2.5%	100.0%

一般に「間接疑問文」と呼ばれる構文は上の表の「動詞+か（「形容詞+か」も含む）」と「名詞（+助詞 or +コピュラ）+か」、「動詞+のか」、「疑問詞+か」にまたがっている。すなわち、次の(21)のように助詞「か」が後接するのが主語と述語（相当）を持つ「節」であり、かつこれを直接に受ける主節述語が存在する構文が間接疑問文と考えられている。

(21) {彼が来るか／彼が良い人か／彼が来るのか／彼は誰か} 分からない。

よって本来であれば、これらの形式を持つ構文をすべて扱えば良かったが、未だ従属カ節のさまざまな構文タイプの整理が十分にできていない段階であるので、本稿では、上の表 1 の動詞に直接「か」が後接する 1610 例を中心に扱う。「動詞+か」における各構文タイプの割合は以下のとおりである（「その他」には先に挙げた比況構文、前後構文、慣用的な構文を含む）。

⁹ なお、「A か、B か、C か…」のような並列のカ節については、主節動詞にもっとも近い最後のカ節を残してそれ以外は削除したが、「動詞+か」以外の用例には、重複用例や削除すべき用例（ノイズ）が残っている可能性がある。

¹⁰ わずかながら形容詞も含まれる。

表 2 近代語における「動詞+か」の各構文の割合 (表 1 行目のカッコ内の数字は先に挙げた用例番号)

間接 疑問 (1)	照応 (12)	潜伏 疑問 (13)	依存 (6)	間接 感嘆 (14)	内容 (8)	二文 連置 (7)	引用 (15)(16)	その他 (17)(18) (19)(20)	TOTAL
316	29	8	1	13	57	234	813	139	1610
19.6%	1.8%	0.5%	0.1%	0.8%	3.5%	14.5%	50.5%	8.6%	100.0%

以下、まず間接疑問構文について、どのようなタイプがあり、どのような特徴があるかを記述していく。

5 心理述語の間接疑問構文 (316 例)

本研究では、カ節を受ける主節述語が心理動詞である構文をもっとも典型的な間接疑問構文とした。間接疑問構文を広く捉える立場では、後で見る照応構文や潜伏疑問構文、依存構文、内容構文も間接疑問構文の下位タイプと見なされるが、本節では、まず、典型的な間接疑問構文として心理述語がカ節を直接に受ける構文を取り上げる。

主節述語が心理動詞である典型的な間接疑問構文において、カ節で表される単純不定命題は、話し手¹¹ (もしくは話し手以外の誰か) の心的領域内で展開される疑問内容を表わす。この構文の要素となる心理動詞は、主に思考・認識・言語活動を表わす動詞であるが、一部の感情動詞もこれを構成する。ここで、この心理述語は典型的には単純不定命題に対する話し手の認識を表わすということが重要である。

(22)

単純不定	話し手の認識
A スルカ(-助詞)	補語 心理述語

(23) 鶏が何をしているか知らないばかりではない。(阿部一族・舞姫)

この構文は、その主節述語のタイプによって、次のように分けられる。藤田 (1983, 1997) は、格助詞を伴わない間接疑問構文を対象に、カ節と主節述語との関係を「一種の応答的意味関係」と認め、主節述語を「未決, 既決, 対処」の 3 つに分類した。未決とは、「知らない, 分からない, 覚えていない, 疑問に思う」などの述語で、「はたして, いったい」などの副詞との共起が可能であるという構造的特徴を持つ。既決とは、「知っている, 分かっている, 明らかだ」などの述語で、「はたして, いったい」などの副詞との共起が不可能であるという構造的特徴を持つ。3 つ目の対処とは、「調べる, 尋ねる, 説明する, 教える, 確かめる」などの述語で、こ

¹¹ 典型的には話し手自身だが、近代語ではこれが拡張し、2 人称や 3 人称の主語で述べられる場合もある。しかしやはり 1 人称主語が圧倒的に多く、3 人称であっても話し手の視点が置かれる人物である。

れらは命令形にできるという構造的特徴を持つ、とする。

本研究では、藤田の上の分類を、カ節で表される情報を話し手が有しているか否か¹²（それが話し手自身の疑念であるか否か）という観点を重視して、用例を未決、既決、対処に分けた。未決タイプとは、話し手がカ節で表される疑問の情報を有していない、カ節の疑問は話し手自身の疑念であることを表わすタイプである。既決タイプは、カ節で表される情報を話し手が有していることを表わすタイプである。このとき、カ節で表される疑問は、話し手以外の誰かの疑念である。対処タイプは、話し手¹³の情報獲得に関わる述語である¹⁴。

高宮（2005）は、室町時代と江戸時代における間接疑問文の主節述語の特徴について、「一つには全体的にく未決タイプが多いこと、二つにはく未決タイプとく対処タイプが見られ、く既決タイプは現れないこと、三つにはく対処タイプは願望のタイが付くか、命令形の形を取ること」と述べている（pp.100-101）。

明治時代に入り、既決タイプが次第に現れ始める。今回調査した近代語の小説テキストでは、すでに1割以上を占めていた。しかし、現代語においても、小説（文学）テキストでは、既決と対処タイプの割合はそれほど高くない（志波 2015）。帰結と対処タイプは、現代語では論説文（評論）テキストに多く見られる¹⁵。よって、近代においても、より論説的なテキストにおいては、既決や対処タイプがもう少し発達していた可能性がある。

表 4：間接疑問構文の主節述語の各タイプの割合

未決	既決	対処	TOTAL
247	38	31	316
78%	12%	10%	100%

また、心理述語の間接疑問構文の発達を見る上でもう一つ重要な観点として、カ節がどのような疑問文のタイプであるか、という点がある。本研究では、これを疑問詞疑問（「何を買うか」）、可否疑問（「服を買うか（どうか）」）、正反疑問（「服を買うか否か」）、選択疑問（「服を買うか、靴を買うか」）の4つのタイプに分けて分類した。先に2節で述べたように、高宮（2005）に

¹² Nakada（1983）では、この「情報を有するか否か」という観点から主節述語が考察されている。

¹³ 典型的には話し手であるが、「彼に私がどこにいるか教えてあげて」のように、話し手以外の人の情報獲得である場合もある。

¹⁴ 以上の観点を重視して分類したため、藤田の分類とはその外延が若干異なっている（志波・金水 2015 参照）。

¹⁵ 参考までに『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）における2001年の書籍（コア・非コア）における割合を示しておく（BCCWJから抽出された用例には論説文が多かった）。論説文テキストでは、文学作品とはかなり異なった分布を示している（志波・金水 2015）。

表 3：BCCWJ（2001年、書籍）における間接疑問構文（「動詞+か」）の各タイプの割合

未決	既決	対処	文脈不明	合計
328	336	378	12	1054
31.1%	31.9%	35.9%	1.1%	100.0%

よれば、疑問詞疑問の間接疑問節は他のタイプに遅れて、江戸時代後期になって一般的になったという。一方で、高宮（2005）のデータを見ても分かるのだが、疑問詞疑問の間接疑問節は、いったん現れ始めるとたちまち優勢になり、江戸後期には他のタイプを抑えてもっとも頻度の高いタイプとなっている。今回のデータを見ても、近代語における心理述語の間接疑問節は、疑問詞疑問タイプの割合がもっとも高くなっている。

表 5：間接疑問節の各タイプの割合

疑問詞	肯否	正反	選択	TOTAL
256	37	20	3	316
81%	12%	6%	1%	100%

以下、はじめに未決タイプの具体的な用例を見ていく。

5.1 未決タイプ

未決タイプは、話し手がカ節で表される命題の情報を持っていない、つまり、カ節の疑問は話し手自身の疑念を表す。未決タイプには次のような動詞（述語）を分類した。ほとんどが思考動詞であるが、わずかながら感情動詞も含まれる¹⁶。

- (24) 知らない（知れない、知らぬ、存せぬ）、分からない、解せぬ、解し兼ねる、領解し得ない、不分明である、料られぬ、会得出来ない、不明である、覚えがない、覚えていない、忘れてしまう、覚束ない、思い放つ能はず、疑ふ、疑わしい、疑問だ、思煩ふ、遅ふ（ためらふ）、無頓着である、感ぜず、迷う、^{きめ}決定ていない、見えない；見当がつかぬ、判断もつかない、勘定がし切れぬ、気のつかない、気に掛からぬ、見分のつかぬ、弁別のつかない、不思議に思う、見向きもしない、訳が解らず；懊悩する、苦しむ、驚く

話し言葉に近い文学作品のデータ（特に会話文の中で）では、「知らない、分からない」が述語の大多数を占める（表 6 に両述語の用例数と割合を示す）。「知れない」という形も多いが、これもすべて「知らない」として数に含めている。なお、「知らない」は「知らないが、…」という外部構造で用いられることが多い（(25), (36), (38)-(41)参照）。

- (25) 何か生理上の理由でもあるか知らんが、とにかく、山に仕事をしてやがてたべる弁当が不思議とうまいことは誰も云う所だ。（野菊の墓）
 (26) 腹では何を思っているか知れはしない。（生）
 (27) その一輪がどこまで簇がって、どこまで咲いているか分らぬ。（草枕）

¹⁶ 通常の思考動詞、複雑述語の心理述語、感情動詞の順に並べた。

(28) 「そんなこといったって、聴くか聴かねえか分かるもんか」(土)

表 6：未決タイプにおける「知らない」「分からない」の割合

知らない	分からない	未決タイプ
104	98	247
42%	40%	100%

高宮 (2003, 2004, 2005) の調査から、間接疑問構文の述語はまず「知らない」から発生し、未決述語で用いられ始めたことが明らかになっている。そして近代語の小説(文学)テキストにおいても、未だ「知らない、分からない」が間接疑問構文の大多数を占めることが見て取れる。

「知らない、分からない」以外には次のような例がある。(31)のように、動作動詞を用いて「関心がない」ことを述べている用例もある。

- (29) と酒井先生方の書生が主税に告げたのと、案ずるに同日であるから、其の編上靴は、一日に市中の何のくらいに足跡を印するか料られぬ。(婦系図)
- (30) 死んでいるか生きているかさえ弁別のつかない彼にもこういう懸念が湧いた。(道草)
- (31) 傍にどんな人がいるか見向きもしなかった。(門)

このほか、思考認識(のみ)ではなく感情を表す動詞も未決に含めたが、数は多くない。これらの動詞ではカ節が助詞(ないし後置詞)を伴っていることが注目される。特に、(32)の「驚く」では、格助詞なしで述べることができない。この特徴は、間接感嘆構文に通ずるものである。

- (32) その頃初めて牛込に住んだ人々は、必ず一度はこの声の何なるかに驚く。(生)
- (33) 或は雲と水が自然に近付いて、舵をとるさえ懶き海の上を、いつ流れたとも心づかぬ間に、白い帆が雲とも水とも見分け難き境に漂い来て、果ては帆みずからが、いずこに己れを雲と水より差別すべきかを苦しむあたりへ—そんな遥かな所へ立ち退いたと思われる。(草枕)
- (34) その返事をいかに書くべきかに就いて一夜眠らずに懊悩した。(蒲団・重右衛門の最後)

近代語の用例には、カ節内にウ・ヨウやダロウ、丁寧を含むものがわずかながら見られる。未だ従属カ節が心理述語の補語としての地位を確立していなかったためかと考えられる。さらに、後に 5.3 の対処タイプの中で見えるが、漱石の作品には、ダロウカ節に助詞を後接させた例(ダロウカラ)もある。

- (35) 一層また鳥羽へ行って、あの巖に掴まって、(こいし、こいし)と泣こうか知らぬ、膚の紐になわつけて、海へ入れられるが気安いような、と島も海も目に見えて、ふらふらと月中の中を、千鳥が、冥土の使いに来て、連れて行かれそうに思いました。(歌行燈・高野聖)
- (36) 私は考へる、たとへばこの鳴沢の翁の為た事が不都合であらうか知れん、けれども間貫一たる者は唯一度の不都合ぐらゐは如何にも我慢をしてくれんければ成るまいかと思ふのだ。(金色夜叉)
- (37) ほかの教師に聞いてみると辞令を受けて一週間から一カ月位の間は自分の評判がいいだろうか、悪るいだろうか非常に気に掛かるそうであるが、おれは一向そんな感じはなかった。(坊っちゃん)
- (38) 何遍致して見ましたか知れませんが、知れませんが、何も聞えは致しませんので。(金色夜叉)
- (39) お見忘になりましたか知れませんが、戦地でお世話になった輜重輸卒の麻生でございます。(阿部一族・舞姫)
- (40) 「どんな理由がありますか知りませんが、ともかく妻子があれば一家団欒の樂を享けないのは嘘でしょう？ 貴様さびしく思いませんか」(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)
- (41) 「誰が然う云うことをお耳に入れましたか存じませんが、芸者が内に居りますなんて飛だ事でございます。(婦系図)

この未決タイプは、動詞が「知れない」の形になると、間接感嘆構文に近づき、その境界があいまいになる。特に、カ節に「どんなに、どれほど」といった疑問詞が含まれる場合に、この傾向が強まる。「程度が大きすぎて知ることができない＝あまりにも程度が大きい」という意味にずれ込んでいくものと考えられる。例えば、(42)は、実際には「非常に辛かった」、(43)は「何度も泣いた」ということを述べる間接感嘆構文とも考えられる ((38)も参照)。

- (42) 翌日のが無いと言われるより、どんなに辛かったか知れませんが。(歌行燈・高野聖)
- (43) 子を持つてば七十五度泣くというけれども、この娘の事ではこれまで何百度泣いたか知れやアしない。(浮雲)

次の(44)は、未決タイプにも見えるが、(45)と同じ二文連置の背景注釈タイプと考えられる。後節「姿が見えない」ことの背後にある事情を推論し、その疑問を前節に差し出している構文である。主節述語が知覚動詞である構文は、これを間接疑問構文と認めて良いか、判断が難しい。知覚動詞については、6.2の潜伏疑問構文でも取り上げる。

- (44) 山嵐はどうなったか見えない。(坊っちゃん)
- (45) 校長はいつ帰ったか姿が見えない。(坊っちゃん)

次のように、従属カ節に助詞がつかずに読点で区切られ、主節述語の前に主語相当の名詞句や副詞句が置かれると、二文連置構文の言い換え型に近づいていく。二文連置構文と間接疑問構文の関係については、6.6でも考察する。

- (46) 主人は何故にこの翁の事を斯くも聞きたださるるか、教師が心解し兼ねたれど問はるるままに語れり。(武蔵野)

5.2 既決タイプ

既決タイプは、話し手がカ節で表される命題の情報を有しており、カ節の疑問は話し手以外の誰かの疑念であることを表わす。既決タイプには次のような思考動詞と言語活動動詞を分類した。

- (47) 分かる(解る)、見る、窺ふ、思い至る、心づく、知っている(能く知る); 告げる、説明する、語らず

既決タイプには、当該の情報を得るに至る原因・理由・条件(波下線)を伴う構文が非常に多い。これは、可能や自発を表わす構文が、当該事態が可能になる条件や自発の契機を表わす句や節を伴うことが多いのと並行した現象だろう¹⁷。この構造は、6.3で見える依存構文にもつながっていく。

- (48) 宗助は所の新聞で、杉原の何時着いて、何処に泊っているかを能く知ってはいたが、【後略】(門)
- (49) 「今度の事を見ても、如何に間が恨まれてゐるかが解りませう。【後略】」(金色夜叉)
- (50) こんな拷問に近い所作が、人間の徳義として許されているのを見ても、如何に根強く我々が生の一字に執着しているかが解る。(硝子戸の中)
- (51) 此方の人措いて下さんせ、と洒落にも嗜めて然るべき者までが、其折から、一寸留女の格で早瀬に花を持せたのでも、河野一家に対しては、お蔭さえ、如何の感情を持つかが明かに解る。(婦系図)
- (52) それと共に彼は隣の森の中の群集の囂々と騒ぐのを耳にして自分が今何のために疾走して来たかを心づいた。(土)
- (53) 「阿母さん、お止しと云えば！」と時子はもう齒痒そうに肝癩声になって、「誰と歩いてたか、聞かなくッたッて分ってるじゃ有りませんか。(其面影)
- (54) 平の座敷か、そでないか、貴客がたのお人柄を見りゃ分るに、何で和女、勤める気や。(歌

¹⁷ 「雪の間から新芽がのぞいていて、春の気配が感じられた」など、自発・可能構文は、その事態の実現を成立させる契機ないし条件を表わす節を持つ構文が多い。

行燈・高野聖)

- (55) 「着いたのは昨日の六時、姉の家に行って聞き糺せば昨夜何時頃に帰ったか解るが、今日はどうした、今はどうしている？【後略】」(蒲団・重右衛門の最後)
- (56) かくて邸内遊覧の所望ありければ、先づ西洋館の三階に案内すとて、迂廻階子の半を昇行く後姿に、その客の如何に貴婦人なるかを窺ふべし。(金色夜叉)

上のような、原因・理由・条件のない既決タイプは、主節述語が文末言い切りではない構造を持つものがほとんどである¹⁸。

- (57) そうしてそれが母の場合とどう違っているかに思い到った時、彼は心のうちで又細君に向かって云った。(道草)
- (58) そして、その大騒の何を意味しているかを語らずに、そのまま急いで向うへと下りて行ってしまった。(蒲団・重右衛門の最後)

このほか、既決タイプには、聞き手に対して話し手自身の行為の認識を要求するという意味の、「見る」の命令形や、「知っているか」という疑問形の述語も含めた¹⁹。

- (59) 此の毛唐人めら、汝、何うするか見やあがれ。(婦系図)
- (60) 「え？」と哲也は目を瞠って、「じゃ、何処に居るか、君、知ってるのか？」(其面影)

最後に、既決タイプと他の構文との相互関係について述べたい。既決タイプは、カ節で表される命題の情報を話し手が有している、つまり、カ節の内容は話し手にとっては疑問ではない、確定した事実であるという意味的特徴から、体系上、間接感嘆構文に非常に近い。例えば、(61)は「こんなに悲しいことはない」、(62)は「道庁の計営が非常に困難が多い」(63)は「私は非常に切ない思いをしている」ということを述べる感嘆構文とも考えられる。それぞれ、「これより上の(こんなに)」「いかに」「どんな(に)」といった句が、程度が甚だしいことを表わす意味を帯び、感嘆の意味をもたらしやすいのだと考えられる。

- (61) 一時に両親に別れて、死目にも逢はず、その臨終と謂へば、気の毒とも何とも謂ひやうの

¹⁸ さらに(58)のような言語活動動詞(発話動詞)は、情報を得たり理解を得たりする意味の「分かる」などと異なり、上で見たような条件節を取りにくい動詞なのだろう。

¹⁹ こうした疑問形は、厳密には話し手が情報を所有していないため、未決タイプである。しかし、話し手がすでに所有している情報を聞き手が持っているか否かを尋ねる場合もあり、分類が煩雑になる上、数の上でも多くなかったため、今回はすべて既決タイプとした。一方で、「既決」とは、本来は動詞が肯定形か否定形かの問題ではなく、「分かる・分かった」のように実現のテンス・アスペクト・ムードで述べられたもののみを分類すべきで、「分かるだろう」「分かるはずだ」など未実現のムードのものは「未決」とすべきなのだろう。このような立場を今回は徹底させることができなかった。今後の課題としたい。

無い……凡そ人の子としてこれより上の悲が有らうか、察し給へ。(金色夜叉)

(62) 然し余はこの道路を見て拓殖に熱心なる道庁の計営の、如何に困難多きかを知ったのである。(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)

(63) 私は全く後悔しました! 貫一さん、私は今になつて後悔しました!! ^{くはし} 悉い事はこの間からの手紙に段々書いて上げたのですけれど、全で見ても下さらないのでは、後悔してゐる私のどんな切ない思をしてゐるか、お解りにはならないでせうが、お目に掛つて口では言ふに言れない事ばかり、設ひ書けない私の筆でも、あれをすつかり見て下すつたら、些とはお腹立も直らうかと、自分では思ふのです。(金色夜叉)

5.3 対処タイプ

対処タイプは、話し手がカ節で表される命題の情報を有しておらず、それを獲得するために何らかの策を講じる(講じない)ことを表わすタイプである。対処タイプには、次のような述語を含めた。

(64) 考える、確かめる、試す、尋ねる、聞く、想像する、顧慮する、観察する、相談する、説明してくれる、云え、頭の中で描く、比較事を致す

高宮(2005)では、江戸後期においても、対処タイプの述語は願望のタイが付くか、命令形の形をとるという形態的な制約があったことが指摘されているが、近代の小説(文学)テキストにおいては、それほど制約は見られない。ただし、未決タイプにくらべて、命令形や意向形、「V-テミル」の形で述べられることが多いという傾向はうかがえる。

先の既決タイプにも言えることだが、対処タイプは、未決タイプに比べ、カ節が助詞を伴うことが非常に多い。

(65) 彼等は嫖客に対する時、わが容姿の如何に相手の瞳子に映ずるかを顧慮するの外、何等の表情をも發揮し得ぬ。(草枕)

(66) 彼はどうしたらこの門の門を開ける事が出来るかを考えた。(門)

(67) 御両親のある事を忘れないで、御両親がどれほどお歎きなさるかを考へて、気を取直してくれ、ゑ、宜いか、【後略】(にぎりえ・たけくらべ)

(68) 彼はその日のその夜に会ふ毎に、果して月の曇るか、あらぬかを試しに、曾てその人の余所に泣ける徴もあらざりければ、さすがに恨は忘れしかと、それには心安きにつけて、諸共に今は我をも思はでや、さては何処に如何にしてなど、更に打歎かるるなりき。(金色夜叉)

(69) 「否、一ツ心当りは無いか、家を聞いて見ようと思うんです。【後略】」(婦系図)

(70) この上は明日中に何とか処置を着ける積り、一方には手紙で母に今一度十分訴たえてみ、

一方には愈々という最後の処置はどうするか妻とも能く相談しようと、進まぬながらも東宮御所の横手まで来て、土手について右に廻り青山の原に出た。(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)

- (71) ああ云ふ主有る婦人と関係遊ばして、始終人目を忍んで逢引してみらつしやる事を触散しますから、それで何方が余計迷惑するか、比較事を致しませう。(金色夜叉)

近代語には、現代語ではよく用いられる「調べる」や、情報獲得のための策を講じないことを表わす「別にする、置いておく、二の次だ」などの述語、また、次の例のようにV-テミルという形の動作動詞も確認されない。

- (72) そう思って枕木が燃えているのを踏み消して、どんな臭がするか腹這いになって嗅いでみた。(黒い雨)

先にも述べたが、特に対処タイプの中に、漱石の作品を中心に「だろわかを」という用例が見られる。「V-むかを」という形を現代語に翻訳した形だろうか ((109), (115)も参照)。

- (73) 彼は今の自分が、結婚当時の自分と、どんなに変わって、細君の眼に映るだろわかを考えながら歩いた。(道草)
- (74) 御米はその時真面目な態度と真面目な心を有って、易者の前に坐って、自分が将来子を生むべき、又子を育てるべき運命を天から与えられるだろわかを確めた。(門)
- (75) 彼はこの袴を着けた男の身の上に、今何事が起りつつあるだろわかを想像したのである。(門)

次の例もカ節に丁寧とタロウを含んでおり、カ節の従属度が相対的に下がっている。

- (76) 就いては今日私の机の抽斗に百円入れて置きましたそれが、貴女のお帰りになると同時に紛失したので御座いますが、如何がでしょう、もしか反古と間違ってお袂へもお入になりませんでしたらうか、一応お聞申します」と腹から出た声を使って、グッと急所へ一本。(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)

6 間接疑問構文の周辺の構文

以下では、典型的な間接疑問構文の周辺に位置する構文として、照応構文、潜伏疑問構文、依存構文、間接感嘆構文、内容構文、二文連置構文、引用構文を概観する。

典型的な間接疑問構文に意味・構造的にもっとも近い位置にあるのは、照応構文と潜伏疑問構文だろう。主節に、従属カ節が表す単純不定と同じ内容を指示する名詞句が心理述語の直接

補語として表れる点で、従属カ節の従属度が相対的に下がっているものの、いずれも主節に話し手の認識を表わす心理述語を持ち、これが従属カ節を間接的に受けている点で、典型的な間接疑問構文に非常に近い構文である。

依存構文はカ節が単純不定命題を表わすものの、その情報を話し手が認識しているか否かを問題にしているのではない（主節が依存述語である）点で間接疑問構文と意味・構造的に異なる。一方で、カ節にダロウや丁寧などを取り得ない点ではカ節の従属度が高い構文であると言える。

間接感嘆構文は、カ節が不定命題ではなく確定した命題である、つまり誰の疑念（疑問）をも表わしていない点で間接疑問構文と異なる。一方で、主節の心理述語が従属カ節を直接に受ける点、また、カ節内にダロウも丁寧も取り得ない点で意味・構造的に間接疑問構文に近い。

内容構文は、カ節が単純不定命題を表わす点で共通するが、これが内容節として、動詞述語ではなく疑問等を表わす抽象名詞にかかっている点で、構造的に典型的な間接疑問構文と大きく異なる。

二文連置構文にはいくつかのタイプがある。典型的な二文連置構文は、主節が話し手自身の心理ではなく、他の人やモノ、事柄の描写であり、この主節の述語は従属カ節を受けるものではない点で、間接疑問構文とは意味・構造的に大きく異なる。従属カ節には主節で描写される事象について話し手がその背景を推論した内容が差し出される。このカ節は、これを直接に受ける述語がない（故に助詞を取り得ない）点、またダロウや丁寧を含みうる点で非常に従属度の低い構文である。

引用構文は、助詞カの後引用のトを持つ構文であるが、この引用節内のカ節の従属度に非常に幅があり、未だ整理できていない。ここでは、主節動詞が心理述語（思考動詞）でかつその心理述語とト節との距離が短く（間に他の節を含まず）、典型的な関節疑問構文に意味・構造的に近いもののみ概観する。

典型的な間接疑問構文は、このような従属カ節を持つ様々な構文との相互交渉の中で発達してきたと考えられる。以下では、間接疑問構文とこれらの構文との違いや連続性について、用例を見ながら考察していく。

6.1 照応構文 (29例)

照応構文は、カ節の命題が話し手（もしくは他の誰か）の疑問を表わし（単純不定）、これをいったん「それ」などの照応形が受け、さらにそれを心理述語が受けるという形式を持つ。

(77)

単純不定	対象	話し手の認識
Aスルカ、ソレ-	助詞	心理述語
前節照応句		

照応構文は、先に述べたように、典型的な心理述語の間接疑問構文に意味的にも構造的にも

非常に近い。次のような例がある（照応形に網掛け）。照応構文に現れる心理述語は「知らない、分からない」などの典型的な動詞は少ない。また、主節の述語とカ節の間に他の成分が入っていたり（(81)-(84)）、複数のカ節を受けていたり（(85)）といった場合が多く、述語との関係を明確にするために照応形が用いられている。

- (78) 「さうなんですけれど金ゆゑで兩個が今死ぬのも余り悔いから、三千円きつと出すか、出さないか、それは分りませんけれど、【後略】」（金色夜叉）
- (79) 「未だそんな事を言やがる！ さあ、何が水臭いか、それを言へ」（金色夜叉）
- (80) 何故意久地がないとて叔母がああ嘲り辱めたか、其処まで思い廻らす暇がない、唯もう腸が断れるばかりに悔しく口惜しく、恨めしく腹立たしい。（浮雲）
- (81) 防いだ後を如何に処置すべきか、其処は我ながら曖昧で、まだ朧と思定めたところがあるではないが、ともかくも当面の急務はこの外に出ぬと思うので、【後略】（其面影）
- (82) 然し機嫌買な彼がどの位綿密な程度で細君に説明してやったか、その点になると彼はもう忘れていた。（道草）
- (83) そうして私の直覚が果して当たったか当たらないか、要するに客観的事実によって、それを確める機会を有たない事が多い。（硝子戸の中）
- (84) 「【前略】三年経って、神の思召に適うかどうか、それは今から予言は出来んが、君の心が、真実真面目で誠実であったなら、必ず神の思召に適うことと思うじゃ」（蒲団・重右衛門の最後）
- (85) 自分は何故東京に上ったか、又た何時来たか、今どうして暮らしているか、これらの処を尋ねて見ようとして止した。（武蔵野）

照応構文は、典型的な間接疑問構文と異なり、カ節にダロウなどの推量や意向形、マショウなどの丁寧形を含むことができる点で、従属カ節の従属度が低く、この点では二文連置構文にやや近いところに位置している。

- (86) 【前略】ああ高坂の録さんが子供であつたころ、学校の行返りに寄つては巻烟草のこぼれを貰ふて、生意気らしい吸立てた物なれど、今は何処に何をして、気の優しい方なればこんなむづかしい世にどのやうの世渡りをしてお出なうか、それも心にかかりまして、実家へ行く度に御様子を、もし知つてもあるかと聞いては見まするけれど、【後略】（にぎりえ・たけくらべ）
- (87) そうしてその挿入した酸漿の根が知覚のないまでに軽微な創傷を粘膜に与えて其処に黴菌を移植したのであつたらうか、それとも毎日煙の如く浴せ掛けた埃から来たのであつたらうか、それを明らかにすることは不可能でなければならぬ。（土）
- (88) 彼は大学を出てから、官途に就こうか、又は実業に従おうか、それすら、まだ判然と心に

極めていなかったに拘わらず、何方の方面でも構わず、今のうちから、進めるだけ進んで置く方が利益だと心付いた。(門)

- (89) 夫はどうなさるなあ、夫に道が立たん事になりはせまいか、そこも考へて貰はにやならん。
(金色夜叉)

6.2 潜伏疑問構文 (8 例)

潜伏疑問構文は、話し手（もしくは他の誰か）の疑問を表わすカ節の命題に、これと同じ不定命題を含む潜伏疑問名詞句が並列的に後続し、これを心理述語が受けるという形式を持つ。従属カ節は、潜伏疑問名詞句の具体的な疑問の内容を表わしている。つまり、上で見た照応構文と非常によく似た構造を持つ。違いは、心理述語の対象となる助詞を伴う名詞句が指示詞（を含む名詞句）であるか、潜伏疑問名詞であるかという点のみである。

- (90)

単	純	不定	対象=潜伏疑問	話し手の認識
A	スルカ	AbsN-	助詞補語	心理述語

高宮（2004）では、ヤラによる間接疑問構文について、この潜伏疑問構文を経て間接疑問構文が成立したことが仮説的に述べられている。上の照応構文と潜伏疑問構文は、二文連置構文と間接疑問構文をつなぐものであると考えられるが、具体的にどのような構造変化を経て、間接疑問構文が成立したのかについては、未だ明らかでないことが多い。おそらく、潜伏疑問構文以外の様々な構文の影響を受けつつ成立したものと考えられる。共時態の体系において、これらが二文連置構文と間接疑問構文をつなぐ位置にあるとしても、通時的な発達の過程については慎重な調査が必要だろう。以下用例を挙げる（潜伏疑問名詞に網掛け）。

- (91) 「何時伺ったら好いか御都合を聞かして頂きたいんですって」(道草)
(92) 【前略】この世はこれほど住みよいに、何故人はそう住み憂く思ふか、殆どその意を解し得まい瞻また人の老やすく、色の衰え易いことを忘れて、【後略】(浮雲)
(93) 江戸が東京に改まった時か、それともずっと後になってからか、年代はたしかに分らないが、何でも私の父が拵えたものに相違ないのである。(硝子戸の中)
(94) 健三は自分の前に坐っている人の真面目さの程度を疑った。果してこの男が彼の復籍を比田まで頼み込んだのだろうか、又比田が自分達と相談の結果通り、断然それを拒絶したのだろうか、健三はその明白な事実さえ疑わずにはいられなかった。(道草、ノカ節²⁰)

知覚動詞による次の構文は、一見潜伏疑問構文のように見えるが、「影も形も」や準体節「小声ながら頻に物言ふ」は「分からない」や「知らない」などの補語にならないため、これは潜

²⁰ 「ノカ節」の用例は、本稿の統計の数の対象にはしていないが、構文間の関係を見る上で重要と思われる用例を適宜挙げている。「名詞・カ節」についても同様である。

伏疑問名詞ではないと考えられる。よって、知覚動詞による以下の構文は、二文連置構文の背景注釈タイプである。

(95) 谷を見下したが、どこで鳴いてるか影も形も見えぬ。(草枕)

(96) 答はあらで、眩くか、規くか、小声ながら頻に物言ふが聞ゆるのみ。(金色夜叉)

次の例は、一見潜伏疑問構文のように見えるが、二文連置構文である(言い換え型)。(97)では「一つの出来事を五条にも六条にも解釈した」話し手の、その心の中の具体的な解釈の仕方(内容)がカ節で提示されている。一方で、(94)は、似たような構造であるが、「それを拒絶したのかを疑う」のように、(ノ)カ節が主節の心理述語に続くと考えられるので、潜伏疑問構文とした。しかし一方で、「その明白な事実さえ疑わずにはいられなかった」話し手の、その心の中の具体的な疑い(疑念)がカ節で提示されているとも考えられ((92), (93)も同様)、連続的である。

(97) 自分に対する夫を平和で親切な人に立ち返らせる積なのだろうか、又はただ浅はかな征服慾に駆られているのだろうか、——健三は床の中で一つの出来事を五条にも六条にも解釈した。(道草, ノカ節)

6.3 依存構文(1例)

依存構文とは、2つのカ節を持ちうる構文で、A節の不定命題の値の決定がB節で述べられる不定命題に依存することを表す。「A節カハ B節カニ/デ 依存動詞」という構文において、A節とB節は「帰結-条件」という意味的な関係を持っている。江口(1996)は、この種の構文が表わす「依存」の意味について、「条件部の変項の取り得る値が変わるごとに帰結部の変項への値の割り当ても変わるということが基本にある」と述べている(p.347)。そして、条件となる節の意味役割を「決め手」と呼び、通常的不定命題を「単純不定」と呼んでいる(p.351)。本稿でもこの命名を採用している。なお、この構文における「Aスルカ」もしくは「Bスルカ」は、潜伏疑問名詞として述べられることもある(「彼が行くかは花子が行くかによる」vs.「彼が行くかは花子の意志による」)。また、事態と事態の一般的な依存関係を表わすため、テンス・アスペクトは超時である。

(98)

単純不定(帰結)	決め手(条件)
Aスルカハ _{主語}	Bスルカニ/デ _{補語}

 依存述語(超時)

(99) に関わる, に影響する, による, で決まる, 決める, で違う, で異なる, で変わる, に任せる, 分かる, 知れる

現代日本語の論説文のデータには、相当数の依存構文が現れるが（志波・金水 2015 参照）、近代語にはほとんど用例が見つからなかった。現代語でも、文学作品にはあまり現れない。今回の近代語小説のデータでは、漱石の作品に 1 例見つかるのみである。よって、(99)には、現代語の論説文テキストに現れる依存構文の動詞を例として挙げた。

- (100) それが何時までつづくかは、私の筆の都合と、紙面の編輯の都合とできまるのだから、判然した見当は今付きかねる。（硝子戸の中）

近代語の論説文テキストとして、『明六雑誌』と『太陽』を調べてみると、『太陽』の中に、わずかながら依存構文を見つけることができた。ただし、カ節を 2 つもつ構文は見られない。古いものから順にいくつか用例を挙げる。

- (101) 如何に南亞の内陸に戦闘を繼續しつゝあるかに由て、其一斑を知るに足らん。（太陽 1901,4）
- (102) 即ち「ヒーゼン」又は「ペーガン」の名が如何に輕侮賤蔑の意を有するかによりて察知するを得べし、（太陽 1901,7）
- (103) それを理解するか否かによつて投票を決する。（太陽 1917,14）
- (104) 一に山口氏が如何なる程度まで労働問題に諒解を有するかに依つて窺知し得らるゝ譯けである。（太陽 1925,3）
- (105) 種々の動物は食品なくして如何程長く生存し得るものであるかと言ふに、この堪へ得る期間は動物の種類によつて異り、又、若いか老いたるかによつて異る。其他肥満せるか羸瘦せるか換言すれば貯藏物質を餘計に持つてゐるか否かによつて異る。（太陽 1925,5）
- (106) 政界の前途は政本合同が可能であるか否かで決定するわけだ。（太陽 1925,10）

この依存構文は、カ節の命題が話し手にとっての疑問というより、ごく一般的な、総称的な人々にとっての疑問であると言える。つまり、話し手の疑念ではなく、他の誰かの疑念であるという意味で、これは既決タイプに体系上近いところにある構文と考えられる。(101)(102)(104)などに既決述語があることを見ても、このことがうかがえる。既決タイプが原因・理由・条件を表わす句を伴う構造で用いられる中で次第に定着し、さらにこれに遅れて、この依存構文が条件を伴う既決タイプの構造の影響を受けつつ発達してきたのだろうか。今後、この依存構文の発達については、論説文テキストを中心に調査する必要がある。

6.4 間接感嘆構文（13 例）

カ節で表される命題が誰の疑念（疑問）でもなく、話し手が事実として認めつつこれを感嘆

の対象としている構文を間接感嘆構文とした（稲田 2007 参照）。カ節の命題が疑問ではないという点で間接疑問構文と異なるが、カ節にダロウや丁寧などの要素を含み得ない点、また、主節の心理述語がカ節を直接に受ける点でも間接疑問構文に非常に近いところに位置していると考えられる。一方で、間接感嘆構文を構成する心理動詞は間接疑問構文の要素となる心理動詞とは若干異なる。また、カ節が対象であることを明確にするためか、格助詞が必ず後接する。

(107)

感嘆の対象	話し手の心情
A スルカ・助詞	感情述語
補部節	

(108) 思ふ、嘆す、責める、ほこる、味わう

それほど用例があるわけではないが、今回の小説（文学）テキストのデータには次のような例が見られた。

(109) 彼は己の不幸の幾許不幸に、人の幸の幾許幸ならんかを想ひて、又己の失敗の幾許無残に、人の成効の幾許十分ならんかを想ひて、又己の契の幾許薄く、人の縁の幾許深からんかを想ひて、又己の受けし愛の幾許浅く、人の交せる情の幾許篤からんかを想ひて、又己の恋の障碍の幾許強く、人の容れられぬ世の幾許狭からんかを想ひて。（金色夜叉）

(110) 然し母と妹との節操を軍人閣下に献上し、更らに又、この十五円の中から五円三円と割いて、母と妹とが淫酒の料に捧げなければならぬかを思い、さすがお人好の自分も頗る当惑したのである。（牛肉と馬鈴薯・酒中日記）

(111) 宗助は過去を振り向いて、事の成行を逆に眺め返しては、この淡泊な挨拶が、如何に自分等の歴史を濃く彩ったかを、胸の中で飽まで味わいつつ、平凡な出来事を重大に変化させる運命の力を恐ろしがった。（門）

(112) 【前略】山は依然として太古、水は依然として不朽、それに対して、人間は僅か六千年の短き間にいかにその自然の面影を失いつつあるかをつくづく嘆ぜずにはいらなかった。（蒲団・重右衛門の最後）

(113) 更に蛙はひっそりと静かな夜になると如何に自分の声が遠くかつ遙に響くかを矜るものの如く力を極めて鳴く。（土）

(114) 穏かに眠れる妻の顔、それを幾度か窺って自己の良心のいかに麻痺せるかを自ら責めた。（蒲団・重右衛門の最後）

次の(115)は、先の(109)の直後の文脈に現れる文であるが、未だ疑問の意味が残ると考え、間接疑問構文の対処タイプと見なした。しかし、「思う」という動詞は、現代語では間接疑問構文を構成するものではない。今後、近代の用例をさらに調査する中で、間接疑問構文と間接感嘆

構文の要素となる動詞を見極めていきたいと思う。

- (115) 嗚呼、既に己の恋は敗れに破れたり。知るべからざる人の恋の末終に如何ならんか
__を想ひて。(金色夜叉)

このほか、先に 5.2 の「既決タイプ」の最後で述べたように、典型的な間接疑問構文の既決タイプは、「いかに」「どんなに」「こんなに」などの程度が甚だしいことを表わす句を伴うと間接感嘆構文に近づく。

- (116) 一時に両親に別れて、死目にも逢はず、その臨終と謂へば、気の毒とも何とも謂ひやうの無い……凡そ人の子としてこれより上の悲が有らうか、察し給へ。(金色夜叉)
(=(61))
- (117) 然し余はこの道路を見て拓殖に熱心なる道庁の計営の、如何に困難多きかを知ったのである。(牛肉と馬鈴薯・酒中日記) (=(62))
- (118) 【前略】後悔してゐる私のどんな切ない思をしてゐるか、お解りにはならないでせうが、【後略】(金色夜叉) (=(63))を一部省略

6.5 内容構文 (57 例)

カ節で表される命題が、疑問を代表とする心的態度を表わす抽象名詞によって受けられ、かつ、カ節の命題が抽象名詞句の内容を表わす構文を内容構文とした。

- (119)

単純不定
A スルカ-ノ/トノ/トイウ

内容提示節 Abs-N,

単純不定
AbsN-ハ A スルカ

内容提示節-ダ

- (120) 要素となる抽象名詞²¹：問題，疑問，問い，考え，疑い，説，懸念，不安，憂い，原因，痛苦，態度，思い，観，感，予期，弁解，相談，事，点

以下用例を見ていく（カ節を受ける抽象名詞句に網掛け）。「節-カ-ノ AbsN」という構造は、後で見る比況の意味ではなく、疑問の意味としては、漱石の作品にしか用例が見られない。現代語でも、この構造におけるカ節が疑問（単純不定）を表わす用例はあまり多くない²²。一方

²¹ 「問題」や「疑問」などと「原因」「態度」の名詞では、カ節と名詞の関係が異なるが、本稿では、内容構文の名詞とカ節の関係についてまでは考察が及ばなかった。今後の課題としたい。

²² 例えば『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』には次のような例が見つかった。

- ・さらに与えられた投資額のもとでどのような資産の組合せ、つまりポートフォリオの意思決定を行うかの問題を解くために、投資家が用いる行動基準を説明しました。(よくわかるファイナンス)
- ・「そうです。体がなくなってしまいますね。命がなくなるか、それとも、体の一部ですむかの追いかけてこです」(毎日が日曜日)
- ・額田王は今、天皇および大友皇子に味方するか、大海人皇子に味方するか分岐点に立っていた。(茜に燃ゆ)
- ・【前略】小さいときから悪いことをしない良い子でいると、悪いことをしたらどうい結果になるかの加減が

で、カ節がノ格によって直接に抽象名詞にかかっていくこの構文は、カ節内にダロウや丁寧を含み得ないことから、間接疑問構文により近いと考えられる。

- (121) けれども、それが何処からどう始まって、どう曲折して行くかの問題になると全く無知識なので、継続という言葉を解しない一般の人を、私は却って羨ましく思っている。(硝子戸の中)
- (122) 要点はただその人が金を貸してくれるか、くれないかの問題にあった。(道草)
- (123) 彼は子供に対する母親の愛情が父親のそれに比べてどの位強いかの疑問にさえ逢着した。(道草)
- (124) こういう手腕で彼に返報する事を巨細に心得ていた彼は、何故健三が細君の父たる彼に、賀正を口ずから述べなかつたかの原因に就いては全く無反省であった。(道草)

次に、「カ節-トノトイウ 心理名詞」の用例を見る。ここではカ節が引用のトで導かれるため、上に見たノ格で名詞句にかかる構造よりも、意向形や推量形(ダロウ)、ジャナイカなどを含むことが多い。こうした構文は、カ節の命題をそのまま間接疑問構文として述べることができない点で、上の「節-カ-ノ AbsN」に比べれば、間接疑問構文から体系上やや離れているところにあると考えられる。一方で、先に2節で紹介したように、間接疑問構文が成立する以前は、このような「カ節トイウ名詞」による構文が間接疑問構文の表わす意味を表わす構文の1つとして用いられていた(高宮 2004)。

- (125) 常よりは淡きわが心の、今の状態には、わが烈しき力の銷磨しはせぬかとの憂を離れたるのみならず、常の心の可もなく不可もなき凡境をも脱却している。(草枕)
- (126) 「【前略】露骨に云って終えば、時代におくれやしないかなどいう考えは、時代の中心から離れて居る人の考えに過ぎないのだろうよ」(野菊の墓)
- (127) 勘次は鶏の抜毛を見て魴が出たのではないかという懸念を懐いて其処ら中を隈なく見た。(土)
- (128) それからもしや自分の解釈が間違っていはしまいかという不安にも制せられた。(道草)
- (129) お貞は茶の間の洋燈を後に、背を丸くして坐っていたが、疵持つ足の唯そわそわと落着かぬ様子、先程の足音をちょっと耳に入れたので、勘附かれたかという疑がその胸にあった。(生)
- (130) 自分は果してあの母の実子だろうかというような怪しい惨ましい考が起って来る。

わからないから、突然の暴挙になる傾向があるのです。(抱きしめて)

・何のためにやっているかの目的もなく、どこまでやろうという目標もなく、どこまでやったら終わりということもなく、ただ何かをやらされている人の姿を想像してみたい。(生き生きガイドブック)

(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)

- (131) 「いっそのこと山上の小屋に一泊して噴火の夜の光景を見ようかという説も二人の間に出了が、先きが急がれるので愈々山を下ることに決めて宮地を指して下りた。
(武蔵野)

「抽象名詞・ハ 節・カ ダ」ないし、「節・カガ 抽象名詞・ダ」という形式を持つ構文は今回のデータには数例のみ見つかった。

- (132) 人々の話柄は作物である、山林である、土地である、この無限の富源より如何にして黄金を握み出すべきかである、彼等の或者は罎詰の酒を傾けて高論し、或者は煙草をくゆらして談笑している。(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)
- (133) この心持ちを、どうあらわしたら画になるだろう一否この心持ちを如何なる具体を藉りて、人の合点する様に髣髴せしめ得るかが問題である。(草枕)

なお、こうした内容構文に現れる「疑念」タイプの抽象名詞は、典型的な間接疑問構文において複雑述語の要素となる名詞である(疑問を持つ、疑念が残る、問題に思う、etc.)。つまり、「彼が約束を守るかの疑念を抱く」という内容構文と、「彼が約束を守るかについて疑念を抱く」という間接疑問構文が連続的なものとして相互に関係し合っていると考えられる。

疑念ではなく感情や態度を表わす心理名詞が核となる次のような内容構文は、疑問ではなく比況を表わす構文になっている。つまり、内容構文には、疑問を表わすタイプと比況を表わすタイプがあることになる。(135)に「あたかも」という副詞があるが、現代語であれば「かのような」という形式で表されるような構文である。この構文は、先に(17)で比況構文と呼んだ「節-かのようにかのごとく」という構文と体系上連続的である。

- (134) 絵の具箱は酔興に、担いできたかの感さえある。(草枕)
- (135) 今までつまらない事を書いた自分をも、同じ眼で見渡して、あたかもそれが他人であつたかの感を抱きつつ、やはり微笑しているのである。(硝子戸の中、名詞述 語)
- (136) ことに昨今自分が已むなく置かれた境遇からして、この際多少自己を侮辱しているかの観を抱いて雑巾を手にしていた。(門)
- (137) 透間に射し入る日の光は、風に動かぬ粉にも似て、人々の袖に灰を置くよう、身動にも払われず、物蔭にも消えず、細かに濃く引包まれたかの思がして、手足も顔も同じ色の、蠟にも石にも固るか、とばかり次第に息苦しい。(婦系図)
- (138) 哲学で候うの科学で御座るのと言って、自分は天地の外に立っているかの態度を以てこの宇宙を取扱う。(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)

6.6 二文連置構文 (234 例)

もっとも直接疑問文に近い構造をもつ従属カ節構文に「二文連置構文」がある。二文連置構文は、従属カ節を直接に受ける述語や名詞句が後節に存在しない。このため、二文連置構文における前節は、間接疑問節よりも従属度が低く、ダロウや丁寧といった要素を含みうる。「二文連置」という名は野村 (1995) による命名だが、近代以前の文章は句読点による書式が整っていないこともあり、現代語であれば句点で区切られるところも、区切られずに続いている場合がある。このため、二文連置には前節の従属度の程度により様々なタイプがあるが、間接疑問構文との関係を考える上で、構造的に重要と思われるものを以下で取り上げ²³、その意味・構造的な特徴を分析する。以下、二文連置構文の中で、トークン頻度の高いものから順に見ていく。

6.6.1 背景注釈型

二文連置構文の中で、頻度も高くもっとも典型的に見られるタイプが背景注釈型である。背景注釈型とは、後節で表される様子や現われといった事実の背後にある事情 (主に原因・理由) を推論し、それを前節に注釈句として添えた構文である²⁴。後続の「事実叙述句」には、話し手が捉えた事象がそのまま差し出されるため、ダロウなどの推量のモダリティはつかない。前節には、現代語では「からか」「ためか」「せいか」といった形式が用いられることも少なくないが (服部 1992)、近代語ではこれらの形式は未だ発達しておらず、「V-シテカ」ないし「節-カシテ」という形式を用いた背景注釈型が確認される。

(139)a.

単 純 不 定	様子・現われ
A スルカ 背景注釈句	B スル 事実叙述句

b.

単 純 不 定	様子・現われ
A シテカ/スルカシテ 背景注釈句	B スル 事実叙述句

(上の a, b ともに、A 節の主語と B 節の主語は典型的に同一で話し手以外の実体)

背景注釈型では、もっとも典型的には前節 (従属カ節) の主語と後節の主語が同一であり、この点では従属カ節はむしろ句であり、前節と後節の結びつきは強いのであるが、前節のカ節は推量のダロウや意向形を含みうる。そして、この文の主語は、後節の様子を知覚・観察し、その背景を推論している話し手 (視点保持者) とは別の実体である。この点で、後節の心理述語の主語が典型的には話し手自身である間接疑問構文とは構造的に大きく異なる。また、間接疑問構文と異なり、文全体を疑問文にすることもできない ((9)参照)。以下、用例の背景推論

²³ なお、本稿では二文連置構文として、間接疑問構文に近い 3 つのタイプを取り上げたが、これ以外に、後節で述べられる事態の時間や場所といった状況が不明であることを前節で不定命題として差し出すタイプ (「8 時になっていたか、彼がようやく帰ってきた」「いずれの御時にか、」) などがある。

²⁴ 背後にある事情を推論するので、現代語では前節が「Vスルノカ」と、「の」が入ることが多い。

を表わす注釈句に下線、様子・現われを表わす事実叙述句に波下線を引く。

- (140) 主税は漸々、其も唾が乾くか、かすれた声で、(婦系図)
- (141) しばらくしてから、宗助は何を考えたか、小さい位牌を篋の抽出の底へしまっ
てしまった。(門)
- (142) 民子は年が多いし且は意味あつて僕の所へゆくであろうと思われたと気がついた か、
非常に愧じ入った様子に、顔真赤にして俯向いている。(野菊の墓)
- (143) 哲也は妙な面をして黙って了って、葉村が何やらまだ照隠しに頻に饒舌るのはもう
能くも聞かず、又しても振向いて改札口の方を見ようとすると、今まで何処に居た
か姿を見せなかった時が、ツイ其処の窓外に立っていたのと、端なくも目が出逢
ったので、極り悪るそうに衝と余処を向いて了ったが、【後略】(其面影)
- (144) 勘次はその冷えが障ったのであつたらうか心持が悪いというて田から戻って来ると
それっきり枕も上らぬようになった。(土)
- (145) 別の一室には書生でも居るか、微吟の聲が洩れていたがその前の薄暗い板間を通る
と突当の部屋が山田巡查の宅。(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)
- (146) 嫁は盃の儀式を為ながらも、新しい夫の美しい鬚と優しい柔かな応対とを嬉しく、
前の夫の荒々しいのに比べて、一種暖かい思を胸に漲らせていたが、母親の蒼く峻
しい皺だらけの顔を見ると、兼ねてその難かしいのを聞いていた故でもあろうか、
忽ち後から水を浴せ懸けられたような気がした。(生)
- (147) 【前略】見ると大きな巾着茄子を二つ三つ丸ごと焼いて、うまく皮を剥いたのへ、
花鰹を振って醤油をかけたのさ、それが又なかなかうまいのだ、いつの間にそんな
事をやったか其の小手廻しのえいことと云ったら、お町は一苦労しただけあつて、
話の筋も通って人のあしらいもそりや感心なもんよ。(野菊の墓)

「V-シテカ」、「節-カシテ」には次のような例がある。

- (148) をりしも漕来る舟に驚きてか、蘆間を離れて、岸のかたへ高く飛びゆく蜩あり。 (阿
部一族・舞姫)
- (149) 土蔵の上には五六人ばかり人が上って頻りに拒いでいた様子だったが、これに面喰
ってか、一人々々下りて、今は一つの黒い影を止めなくなって了った。(蒲団・重右衛
門の最後)
- (150) シカシ今井の叔父さんは流石に倦憊れてか、大きな体軀を僕の傍に横えてぐうぐう
眠って了った。(武蔵野)
- (151) 【前略】靴の塵埃だらけも好いが、その横腹の皺目の擦切れた隙から、靴下も穿か
ぬかして、素足の甲が微見える。(其面影)

- (152) 鹿は少しも人の居るに気が付かぬかして、小藪の蔭を閑に歩るいて此方に近いて来た。 (武蔵野)
- (153) 【前略】遊ぶに屈強なる年頃なればにやこれを初めに一週には二三度の通ひ路、お力も何処となく懐かしく思ふかして三日見えねば文をやるほどの様子を、朋輩の女子ども岡焼ながら弄かひては、(にごりえ・たけくらべ)

次の例は、後節で述べられる事実が話し手自身のことである点で、他の多くの背景注釈型とは異なる。話し手自身がある事態を自分が実現できない、もしくは自分が理不尽な境遇に置かれることの背後の事情を推論し、前節で提示している。ここで興味深いのは、(157)のように後節が思考・認識を表わす心理動詞であると、間接疑問構文に意味的に近接していくということである。

- (154) 俺はその道を尽してゐるか、尽さうと為てゐるか、思つた女と添ふ事が出来ん。 (金色夜叉)
- (155) 本当に己れは木の股からでも出て来たのか、遂いしか親類らしい者に逢つた事も無い、(にごりえ・たけくらべ、ノカ節)
- (156) 「ほんに、わしゃ今日らお内儀さん処さ行くべと思つていたら、何ちこつたかこんな騒ぎではあ行くも出来ねえで、わしゃ昨日帰つて来た処なのせえ、お内儀さん」(土)
- (157) 眼の色と云わんより、眼と地の相交わる所が、次第に色を取り替えて、いつ取り替えたか、殆んど吾眼の欺かれたるを見出し得ぬ事である。(草枕)
- (158) 人の浅ましきか、我の愚なるか、恩人は酷くも我を欺きぬ。(金色夜叉)

6.6.2 課題提示型

課題提示型は、前節の従属カ節で課題としての疑問(単純不定)が提示され、それに対する一応の回答や処置が話し手の判断として後節に述べられる構文である。ここで、前節の主語になるのは上の「背景注釈型」と異なり、話し手自身であることが多い。後節には話し手の判断が提示されるので、この節の述語はダロウやカモシレナイなどのモダリティを含むことができる。

- (159)

単 純 不 定	(暫 定 的) 判 断
A スルカ	B ダ/ダロウ
<small>課題提示節</small>	<small>解答提示節</small>

(A節の主語は話し手であることが多く、B節には話し手の判断が差し出される)

課題提示型は、後節が前節の課題を受けた条件形で始まることが多い。前節を受ける条件形

などをまったく持たない(164)-(166)などは、前節と後節とのつながりが読み取りにくく、カ節がかなり直接疑問構文に近づいている。

- (160) 焼て粉にして飲んでしまおうか、そうしたら些とはあやかるかも知れん、アハハハハ」(浮雲)
- (161) 断ったら嫌われようか、嫌われては甚だ不好い。(婦系図)
- (162) 「そんな事で俺の胸が霽れると思つてゐるか、殺しても嫌らんのだ」(金色夜叉)
- (163) 比ぶれば幾干か服装は優っているが、似たり寄たり、何故二人とも洋服を着ているか、寧ろ安物でも可いから小ザッぱりした和服の方が可さそうに思われるけれども、(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)
- (164) イヤ世界十幾億万人の中、平気な人でないものが幾人ありましようか、詩人、哲学者、科学者、宗教家、学者でも、政治家でも、大概是皆な平気で理窟を言ったり、悟り顔をしたり、泣いたりしているのです。(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)
- (165) <【前略】 このはるかな思いをどこに寄せたらよいであろうか、ただ悠久な大空のみがそれにふさわしい。>(草枕)
- (166) 一宿屋へ茶代を五円やるのはいいが、あとで困りやしないか、田舎へ行って頼りになるは御金ばかりだから、なるべく儉約して、万一の時に差支えない様になくっちゃいけない。(坊っちゃん)

次の例も、前節で課題としての疑問を提示し、その回答を後接で提示しているとも見なせる。一方で、後節が話し手の認識を表わす述語であるため、間接疑問構文に限りなく近づいている。これは、本稿で典型的間接疑問構文とするもののカ節と心理述語との関係が藤田(1997)で「一種の応答的意味関係を内実として成立するもの」(p.158)とするとところにも通ずる。(167)は、同じくカ節に丁寧を含む(38)-(41)と連続的であるが、読点で区切られている点で、二文連置的である。

- (167) 「何うでしたか、最う忘れましたよ。【後略】」(婦系図)
- (168) 「どうするこったか自分の子供でもありやすめえし、俺らがにや分んねえな」卯平は何処までも乾たいいようである。(土)

6.6.3 言い換え型

言い換え型とは、後節で述べられる事実(様子)について話し手が自身の解釈から捉えなおして前節に不定命題として差し出す構造を持つタイプである。後節で述べられる事実を、話し手が不定命題として捉えなおし、言い換えていることが表される。ただし、このタイプについ

ては、用例も限られているため、未だ正確な一般化に至っていない（言い換えられている部分に波下線）。

(169)

単 純 不 定 A スルカ	言 換 え 節	事 実 B スル	事 実 叙 述 節
------------------	---------	-------------	-----------

(170) どれだけ涙が出たか、隣室の母から夜が明けた様だよと声を掛けられるまで、少しも止まず涙が出た。（野菊の墓）

(171) 壮といわんか美といわんか惨といわんか、僕等は黙然たまま一言も出さないで暫く時く石像のように立て居た。（武蔵野）

後節の主述を含む事実全体が前節で言い換えられるとき（前節は「不思議でならない」「全く自ら弁せず」の具体的内容）、後節が心理述語であると、間接疑問構文に限りなく近づいて行く。

(172) 【前略】お京さん母親も父親も空つきり当が無いのだよ、親なしで産れて来る子があらうか、己れはどうしても不思議でならない、と焼あがりし餅を両手でたたきつつ例も言ふなる心細さを繰返せば、【後略】（にぎりえ・たけくらべ）

(173) 【前略】又空く神は傷み、魂は驚くといへども、我や怒る可き、事や哀むべき、或は悲む可きか、恨む可きか、抑も喜ぶ可きか、慰む可きか、彼は全く自ら弁せず。（金色夜叉）

また、後節に含まれる名詞句について、前節で不定命題として言い換える場合、後節に心理述語が含まれると、潜伏疑問構文に近づく²⁵。

(174) 神聖なる恋以上に二人の間は進歩しておりはせぬか、けれど手紙にも解らぬのは恋のまことの消息であった。（蒲団・重右衛門の最後）

(175) どうして手提革包を拾ったかその手続まで詳わしく書くにも当るまい。（牛肉と馬鈴薯・酒中日記）

6.7 引用構文（813例）

最後に、引用構文について概観する。引用構文は、先に用例(15)(16)で見たように、「節-か」が引用の下で受けられるものすべてを分類した。これは、非常に直接疑問構文に近いタイプか

²⁵ 「書く」という動詞は、現代語では間接疑問構文の要素になるが、今回の近代語の調査では用例は見つからなかったため、用例(175)は潜伏疑問構文とはせず、二文連置の言い換え型に含めた。なお、「書く」という動詞は、外的運動を伴う動詞であるが、「言う、相談する」などの言語活動動詞（発話動詞）と同類であり、本研究ではこれを心理動詞としている。心理動詞と動作動詞については、奥田（1968-72）の分類を基にしている。

ら間接疑問構文に近いタイプまでヴァリエーションが豊富である。ここでは、間接疑問構文との関係で、従属カ節に引用のトが直接後接し、主節に思考・認識の心理動詞を持つタイプの用例のみを挙げる。引用構文の引用節は非常に自由にさまざまな形式を含みうるため、さまざまな節タイプがある。以下には、典型的な間接疑問構文に意味・構造的に近いものを挙げたが、(178)-(180)のように、そのままでは間接疑問構文で述べられないタイプが多く、ここに引用構文が用いられる理由があるのだろう。なお、先に2節で紹介したように、高宮(2004)では、間接疑問構文が成立する以前は、このような引用構文が、間接疑問構文が表わす意味を表わしていたことが述べられている。

- (176) 師としての温情と責任とを尽したかと烈しく反省した。(蒲団・重右衛門の最後)
- (177) 僕の胸はワクワクして来た、何故叔父さんを起さなかったかと悔んだが最早遅い。(武蔵野)
- (178) 何方かという、昔よりも今の方が却て肥っていはしまいかと疑れる位であった。(道草)
- (179) 筆をとって書こうとすれば、書く種は無尽蔵にあるような心持もするし、あれにしようか、これにしようかと迷い出すと、もう何を書いてもつまらないのだという呑気な考も起ってきた。(硝子戸の中)
- (180) 昨夜の月に似もやらぬ、今日は朝より曇り勝にて、今降り出すか降り出すかと危んでいたが、見ると既に雨になって、【後略】(蒲団・重右衛門の最後)

7 おわりに

以上、近代の小説(文学)テキストにおける間接疑問構文について、高宮の一連の調査と比較しながら、その発達の痕跡がどの程度見て取れるかを記述した。今回の調査により、明治期に入っても、小説(文学)テキストにおいては、間接疑問構文の主節述語はやはり未決タイプが優勢であり、また、間接疑問節のタイプとしては疑問詞疑問タイプがもっとも多く用いられていることが明らかになった。

一方、江戸後期においては述語の形態に制約があった対処タイプであるが、近代においてはかなり自由な形で用いられていることも分かった。さらに、未発達であった既決タイプも、1割以上の割合で用いられている。ただし、既決タイプの構文はその用いられる構造に特徴があることも分かった。既決タイプは、原因・理由・条件を表わす句を伴った構造で述べられることが非常に多く、この構造は、明治期に現れ始めたと考えられる依存構文の発達にも影響を与えていると考えられる。

また、本研究では、主節述語が心理動詞である間接疑問構文を典型的な間接疑問構文とし、これと同じ従属カ節を持つ構文として、依存構文、間接感嘆構文、照応構文、潜伏疑問構文、

内容構文、二文連置構文を主に取り上げ、それぞれの構文の意味・構造的な特徴と、間接疑問構文との関係（ネットワーク）を考察した。この中で、未決タイプの「知らない」や既決タイプ（「分かる」「知っている」等）の間接疑問構文は、間接感嘆構文に意味的に非常に近づく場合があることを明らかにした。また、これまで間接疑問構文との具体的な関連性が明らかでなかった二文連置構文であるが、この構文には少なくとも背景注釈型、課題提示型、言い換え型という3つのタイプが存在し、いずれも後節に話し手自身の認識を表わす心理述語が含まれると、間接疑問構文に近づいて行くことが分かった。

本研究では、動詞述語（と形容詞述語）の従属カ節のみを扱ったが、今後は、名詞述語のカ節や「の」を含む「ノカ節」についても考察を広げていきたい。また、明治期に一般化したと見られる、疑問節に後節する助詞の使用実態や、「かどうか」の成立についても詳細な調査を進めていきたいと考えている。

また、今回調査したデータは、「小説」というジャンルに限ったにも関わらず、やはり様々な文体が入り混じる結果になってしまった。「小説」というジャンルは、「論説文」に比べればより話し言葉に近い文体が用いられると考えたが、「会話文」と「地の文」では大きく文体が異なり、また、明治という時代が特に近代における言文一致の変化の過渡期にあり、作家によってその文体に大きな差があることも否めない。今後はこうした文体の差に対しより慎重に調査を進めなければならない。

なお、本稿では、近代語における間接疑問構文の実態を可能な限り記述するため、なぜそのような特徴を持つのかという理由が不明である言語事実についても、できる限り指摘し、記述するよう心掛けた。本稿の記述・考察は未だ不十分であり、整理されていない点多々あるが、今後、さらに調査が進む中で、1つ1つの言語事実が有機的な関連性を持ちながら解き明かされていくものと考えている。

用例抽出資料

近代語データ

- ・『CD-ROM 明治の文豪』より（表題の作品以外の作品も含まれる、著者生年順）
森鷗外（1862 生）『雁』『青年』『キタ・セクスアリス』『阿部一族・舞姫』『山椒大夫・高瀬舟』
／二葉亭四迷（1864 生）『平凡』『浮雲』『其面影』／伊藤左千夫（1864 生）『野菊の墓』／夏目漱石（1867 生）『門』『草枕』『道草』『三四郎』『硝子戸の中』『坊っちゃん』／尾崎紅葉（1868 生）『金色夜叉』／国木田独歩（1871 生）『武蔵野』『牛肉と馬鈴薯・酒中日記』／樋口一葉（1872 生）『にごりえ・たけくらべ』／田山花袋（1872 生）『蒲団・重右衛門の最後』『生』／泉鏡花（1873 生）『歌行燈・高野聖』『婦系図』／長塚節（1879 生）『土』
- ・『明六雑誌コーパス』（国立国語研究所，2012 年公開）
- ・『太陽コーパス—雑誌『太陽』日本語データベース—』国立国語研究所編，博文館新社

現代語データ

- ・『CD-ROM 新潮文庫の 100 冊』より
井伏鱒二 (1898 生) 『黒い雨』 (1965)
- ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』 (国立国語研究所)

参考文献

- 石居康男 (2008) 「日本語の『懸垂疑問文』に関する一考察」『文の語用論的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言』 (1), 平成 19 年度科学研究費補助金研究成果報告書, 63-81.
- 稲田俊明 (2007) 「間接感嘆文の認可条件と言語機能」『文學研究』 104, 九州大学大学院人文科学研究院, 51-77.
- 江口 正 (1990) 「日本語の間接疑問文の構文論的特徴—数量詞・不定代名詞との類似点について—」『九大言語学研究室報告』 11, 40-53.
- 江口 正 (1994) 「間接疑問節が二つ共起する文について」『九大言語学研究室報告』 15, 70-81.
- 江口 正 (1996) 「間接疑問節の担う意味役割—特に「決め手」解釈について」『愛知県立大学外国語学部紀要 言語・文学編』 28, 343-358.
- 江口 正 (1998a) 「日本語の間接疑問節の文法的位置づけについて—不定的同格要素として—」『九大言語学研究室報告』 19, 5-24.
- 江口 正 (1998b) 「引用節・間接疑問節と内容名詞句の共起関係について」『愛知県立大学外国語学部紀要言語・文学編』 30, 325-344.
- 江口 正 (2002) 『「A は B 次第だ」の解釈について—値の間の相関関係—』『福岡大学日本語日本文学』 12, 71-82.
- 江口 正 (2013) 「間接疑問節をとる述語の種類と項構造」日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究, 第 1 回研究発表会 (NINJAL) ハンドアウト.
- 江口 正 (2014) 「主節の名詞句と関係づけられる従属句のタイプ」益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦編『日本語複文構文の研究』, 143-167, ひつじ書房.
- 奥田靖雄 (1968-72) 「を格の名詞と動詞のくみあわせ」『教育国語』 12, 13, 15, 20, 21, 23, 25, 26, 28 号 (再録: 言語学研究会編『日本語文法・連語論 (資料編)』 1983, 151-279, むぎ書房).
- 衣畑智秀・岩田美穂 (2010) 「名詞句位置の力の歴史—選言・不定用法を中心に—」『日本語の研究』 6 (4), 1-15.
- Kinsui, Satoshi (2007) "The Interaction between Argument and Non-argument in the Diachronic Syntax of Japanese," in *Current Issues in the History and Structure of Japanese*, 253-261, Kurosio Publishers.
- 志波彩子 (2015) 「日本語の間接疑問構文の発達をめぐって—近代から現代へ—」日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究, 第 6 回研究発表会 (NINJAL) ハンドアウト.
- 志波彩子, 金水 敏 (2015) 「古代語・現代語資料の場合—コーパスからデータへ」 JLVC2015

- (国立国語研究所 時空間変異研究系 合同研究発表会) ハンドアウト.
- 高宮幸乃 (2002) 「明恵上人関係講説聞書類における「問…答…」という文章形式と疑問文の表現形式との関係：文体と文法の交渉」『三重大学日本語学文学』13, 1-15.
- 高宮幸乃 (2003) 「現代日本語の間接疑問文とその周辺」『三重大学日本語学文学』14, 116-104.
- 高宮幸乃 (2004) 「ヤラ (ウ) による間接疑問文の成立: 不定詞疑問を中心に」『三重大学日本語学文学』15, 124-111.
- 高宮幸乃 (2005) 「格助詞を伴わないカの間接疑問文について」『三重大学日本語学文学』16, 104-92.
- 高山善行 (2015) 「間接疑問文の成立をめぐって—ケム型疑問文を中心に—」日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究, 第7回研究発表会 (大阪大学) ハンドアウト.
- 竹村明日香・金水敏 (2014) 「中世日本語資料の疑問文—疑問詞疑問文と文末助詞との相関—」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 報告書』(1), 3-20.
- Nakada, Seiichi (1983) *Aspects of Interrogatives Structure*, Kaitakusha.
- 野村剛史 (1995) 「カによる係り結び試論」『国語国文』64(9), 1-27.
- 服部 匡 (1992) 「現代語における「～か」のある種の用法について」『徳島大学国語国文学』5, 57-65.
- 藤田保幸 (1983) 「従属句『～カ (ドウカ) の述部に対する関係構成』『日本語学』2, 76-83.
- 藤田保幸 (1997) 「従属句「～カ(ドウカ)」再考」『滋賀大学教育学部紀要. II, 人文・科学・社会科学』47, 160-151.
- 森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦 (編), 窪菌晴夫 (監修) (2015) 『甕島里方言記述文法書』, 国立国語研究所
(<http://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/bitstream/10112/9071/1/KU-1100-20150300-00.pdf>, 2015年8月20日最終アクセス)